

欣求としての近江ARS 〔敷居を越える方法〕

思いつくまま近江の歌を挙げてみると、たとえば「にほの海やかすみて暮るる春の日にわたるも遠し瀬田の長橋」(新後撰)がある。作者の藤原為家(一一九八―一二七五年)は、かの歌道の宗匠・定家卿の子息。俊成、定家と続いた三代目の為家にしてみれば、ありがた迷惑といえはその通りで、若いころはなかなか定家卿をやきもきさせたという。

さて、この歌は文永二年(一二六五)七月に後嵯峨院主催の歌会で詠まれているが、この年五月、三井寺は比叡山僧徒の焼き討ちにより堂塔坊舎が灰燼に帰している。このとき僧徒たちは、三井寺名物「往古の名鐘」を奪い、湖上を渡って坂本まで運んでいる。この耳目を惹いた珍事は、後に「弁慶の引摺り鐘」の伝説で知られることになるが、当時の為家も「思ひきや大津の鐘の浦づたひ我が立つ杣に鳴らんものとは」(夫木抄)を残している。作の好悪は知らず、「浦づたひ」は源氏物語から石山寺、「わが立つ杣」は伝教大師から比叡山へのもじりが入り、当事者にとって噴飯、今日では軽妙な風詠となっている。

ところで、晩年を迎えた幸田露伴は『連環記』において、人と人が環となって相い連なり、歴史を紡いでいく精妙かつ神韻な人間曼荼羅を描ききっている。いま、露伴の先蹤を追って、近江という織物を織り上げるには、縦糸と横糸を紡ぎあわせる方法と使用方法を探索していく必要がある。それも願わくば『連環記』の引く、慶滋保胤が大江匡衡について「鋭士教騎、介冑を被り、駿馬に鞭打って、粟津の浜を過ぐるに似て、その鋒森然として当るものもなく見ゆ」と評した言行、その気概を以ってしてである。

琵琶湖をいただく近江、そこは古来より人々の行き交った地、いま伝わる歌枕や名所旧蹟などは、人々が繰り広げてきた生と死の物語の上澄みにすぎない。それだけに眼前に広がる琵琶湖、その風景は何かを隠している。なるほど古人にとって琵琶湖は天台薬師の池、常楽我浄の風が吹き七宝蓮華の波も立ったであろうが、いま現在、さざ波騒ぐ水面に何を見るのか。何よりも琵琶湖は、不可視の世界への敷居、異界へとつづく深淵のとぼ口であり、英雄の夢が夢のまま潰え去り、まつろわぬ人々への哀惜が積み重なった近江への窓でもある。いつの時代も問題なのは、見えないもの、隠されたものである。

ここに松岡正剛氏から放たれた一道の光を受け、われら遊塵となって、乾坤一擲、近江ARSを起動するのみ。